

## 令和7年度 文京区障害者地域自立支援協議会

### 第1回子ども支援専門部会 要点記録

日時 令和7年6月16日（月）午前10時00分から午後12時00分まで

場所 文京シビックセンター地下1階 アカデミー文京 アトリエ

#### ＜会議次第＞

1 開会

2 議題

（1）令和7年度障害者地域自立支援協議会子ども支援専門部会について

【資料第1-1号】 【資料第1-2号】 【資料第1-3号】 【資料第1-4号】

（2）令和7年度子ども支援専門部会第2回（研修会①）について

【資料第2-1号】 【資料第2-2号】 【資料第2-3号】

（3）令和7年度子ども支援専門部会第3回（研修会②）について

【資料第3号】

3 その他

#### 《参考資料》

・令和7年度 文京区障害者地域自立支援協議会子ども支援専門部会員名簿

#### ＜出席者＞

向井 崇 部会長、勝間田 万喜 副部会長、高山 直樹 部会員、萩野 美佐子 部会員、

塚本 了介 部会員、高山 陽介 部会員、内田 千皓 部会員、高谷 通代 部会員、

柿沼 真理子 部会員、田邊 裕子 部会員、川崎 洋子 部会員、加藤 たか子 部会員。

高橋 拓也 部会員、小野寺 素子 部会員

#### ＜欠席者＞

内海 裕美 部会員、井上 アヤ乃 部会員

#### ＜傍聴者＞

2名

## 1 開会

部会員挨拶

部会長 向井部会員に決定

副部会長 勝間田部会員に決定

本日の予定の説明等

## 2 議題

(1) 令和7年度障害者地域自立支援協議会子ども支援専門部会について

資料第1-1号から資料第1-4号について事務局及び向井部会長から説明

(2) 令和7年度子ども支援専門部会第2回（研修会①）について

資料第2-1号から資料第2-3号について、事務局から説明、以下質疑応答・意見交換

- ・切れ目があるということは、様々な制度、仕組みがそこに入っているということ。その中で、支援者が全体的に集まって、子どもを真ん中に置いてネットワークをつくっていく意識が見えにくい。モニタリングを行う意識がないのか、あるいはできにくいのか。何が問題でできないのか、考える必要がある。
- ・キーパーソンが明確でないと、誰も責任を持たず、部分的な関わりの中で完結してしまう。保護者にキーパーソンの役割を投げてしまうと、保護者も困難を抱えるケースは対処できない。
- ・支援者は各々の専門性のもと、強い責任感を持っているが、専門外の部分で、責任が取れなことには一步引いてしまう。お互いの専門的な部分をリスペクトして関わるムードを醸成できれば。制度の話というより、気持ちの部分。連携を取ったときに、もう少し突っ込んでくれてもいいのになと思うことがあり、そこにも切れ目があると感じる。
- ・子ども支援専門部会で研修会を行う意義として、最も大事な点は顔を合わせるところ。様々な垣根を越えて、年齢や分野の垣根を越えた支援ネットワークをつくっていけるといい。
- ・支援者各々の姿勢が連携ありきではないと日頃から感じる。できる限りアウトリーチすることで、子どもが立体的に見えてきて、できる支援も変わってくる。今回の研修会でも、なぜ連携できないのか、という点も一つの意見としてほしい。
- ・官と民の境目も課題。例えば計画相談だと、教育センターに所属している相談支援事業所の子は全て計画相談に繋がるが、民間の児童発達支援の子はほとんどセルフプランになってしまい、格差がある。

- ・計画相談の利用者は、将来的なことというより、いま児童発達支援を受けるために利用するケースが多い。計画相談の意義が伝わっていない。どう区民の方に伝えていくか、という点も大切か。また、計画相談を行う事業所の不足も課題。ただし、事業所が空いているからといって、そこが利用者のニーズに合うとは限らない。
- ・文京区で最もニーズがあり、不足している部分をはっきりさせて、意見を上げていくことが必要。
- ・学校では、担任や学年ごとに、生徒への関わりがうまくいくかどうか異なっていた。そこで特別支援教育コーディネーターという、間を取りつなぐ役割をつくった。地域にも同様のコーディネーターがいると便利かと。誰の責任という話になると、責任主義があるので、誰も動かない状態になりかねる。
- ・保護者がまず相談しやすいのは学校という意見はよくある。ただ、本来は家庭で対処すべきトラブルも、学校が相談を受けている現状がある。近頃は保護者同士の関係が薄く、以前は保護者同士で解決できたことが今はできなくなっている点も、問題と感じる。
- ・日頃、相談を受けていて、本人のニーズが見えにくいと感じる。保護者や学校、放デイの視点が明確な一方、本人はどう思っているか分からずただ真ん中にぽつんといいる、といった状況が見受けられる。しかし、本人からの発信は難しい。
- ・特別支援学校でも、不登校の生徒が増えている。家庭に問題があるケースが多い。不登校の原因是、人間関係、SNSトラブル、保護者の生活リズムが整わず、子どもが引きずられるケースも。オンラインゲームのトラブルは、特に高等部から入学する生徒に多い。
- ・被支援者を知っている支援者をたくさんつくっていくことが大事。その意味でも、子ども支援専門部会での議論を通して、子どもを支えていく機運を高めていきたい。部会員だけのこの場でも多くの議論が出てくるので、研修会の中でいろんな方と意見交換ができるといい。

### (3) 令和7年度子ども支援専門部会第3回(研修会②)について

資料第3号について、事務局から説明、以下質疑応答・意見交換

- ・第2回の研修会は、顔の見える関係づくりを、第3回は実際の事例を通して文京区独自の地域課題を抽出し、解決への糸口に向けて知恵を出し合うことを目的とする。
- ・0歳から18歳の記録ツールとしてマイ・ファイル「ふみの輪」があるが、保護者に手渡してそのままになるため、活用のレベルは保護者によりけりになっている。「ふみの輪」を作っ

た目的は、母子手帳の学生版のように、支援や検査、子どもを取り巻く対話の記録を残して、それを大人になってもつないでいくこと。ただ、保護者に渡して、後追いをしていないところもあり、橋渡しの橋になっていない面もある。

- ・「ふみの輪」のような子どものアセスメント情報を、ライフステージに応じて一貫性を持ちながら、成人の支援でもどう生かせていくかが課題。保護者だけがキーパーソンになるのは難しい。いろんな支援者が保護者を支え、子どもの情報をどうつなげていくかがポイントになる。個人情報への配慮も現状大きな課題かと思う。
- ・ある程度の過去の状態が分からないと、結局現在の支援も考えられない。学校が関わる18歳までは、個別の情報については把握できていたが、18歳過ぎたところで分からなくなることも。なるべく情報の密度を濃くしてつなげていけたら。「ふみの輪」の活用が難しい点は、保護者が求めている情報や載せたい情報と、「ふみの輪」がカバーしている点にずれがあるのかも。ただ記録があるだけの状態でなく、記録を何に使うか、目的が明確になれば意味も出てくるかと。
- ・令和6年の報酬改定時に事業所間連携加算というのができる、一つの事業所がコア事業所に指定されて、そこを中心に支援者たちが連携を取るケースも出ている。コア事業所になってみて、連携や調整が難しいと感じた。会議を調整すると1か月先になることも多く、例えば思い立った翌日にケース会議ができたら、連携しやすいと感じる。ただし、オンライン会議は個人情報漏えいのおそれがある。A君支援者チャットのようなものがあれば、情報共有も円滑になるが、やはり個人情報の観点から難しい。
- ・地域医療では、主治医を中心とした支援者のチャットのようなものがあるものの、課題点はいくつかある。チャットの運用が不得意な方が集まれば発展しないし、行政は個人としても組織としても入れない。また、医療現場はリアルタイムの情報共有が命に関わるため必要との見方もあるが、地域支援として緊急性を求められることは少ない。チャットを作るなら、どういう目的で作るのかを積み上げる必要があるかと。